

## S. キェルケゴールの心理学的方法

——《心理学的実験》をめぐって——

平林 孝裕

### はじめに

キェルケゴール研究において、その《心理学》<sup>(1)</sup>を理解することはきわめて重要な課題である。その理由は、キェルケゴールの諸著作において、とりわけ仮名的<sup>かめい</sup>と呼ばれる著作において《心理学》という表現がしばしば見出されるばかりでなく、日誌記述が報告しているように<sup>(2)</sup>、キェルケゴールその人が「心理学者」と自認しているからである。また同時に、20世紀となって実存思想の興隆とともに、心理学思想や心理療法にも大きな影響を与えたからでもある。

しかしながら、キェルケゴールの《心理学》は、いわゆる現代的な意味での心理学ではないことは注意されるべきである。以下で考察するように、当時は、科学的な手法にもとづいた経験的学としての心理学が整備されておらず、したがってキェルケゴールの著作でわれわれが会う《心理学》との表現は、今日のそれとは異なっているのは言うまでもないからである。なかでも誤解を招きやすいのは、キェルケゴールがみずからの心理学を指して「実験的心理学」と呼んだり、また「心理学的実験」という表現を使う場合である<sup>(3)</sup>。

これまで研究者ならびに注解者はしばしば、キェルケゴールの心理学を問題にするとき、当時の《心理学》は、現代的な意味の心理学というよりも「人間学」と理解すべきであると説明してきた<sup>(4)</sup>。たとえ《心理学》を人間学と言い換えたところで、必ずしも多くのことが明瞭になったわけでもないだろう。さらに「実験的心理学」、または「心理学的実験」という表現を理解しようとする場合は、この読み替えは、ほとんど役立たない。したがって求められているのは、このような読み替え、言い換えではなく、キェルケゴールの「心理学」が、とりわけ「実験的心理学」、または「心理学的実験」がいったい何を意味するのかを探ることにちがいない。

このような問題、つまり「心理学」、とりわけ「実験的心理学」の解明に関して、従来の研究は関心が低かったように思われる。それらはしばしば現代心理学の用語・枠組みを援用し、そのなかでキェルケゴールを説明・解釈するにとどまって、キェルケゴールの心理学、または心理学的実験の意味を、キェルケゴールに即して理解しようとの姿勢に乏しかったと言わなければならない。

わずかな例外が、ハワード・ホングの注解<sup>(5)</sup>と最近発表されたチェンシー・タンの

論文<sup>(6)</sup>に見られる。ホングは『反復』（くわえて『おそれとおののき』）を理解するための歴史的な導入を書いて、そのなかでキェルケゴールにおける「実験」という言葉の意味、当時の心理学はいかに理解されていたかについて、簡潔ながら重要な報告をなしている。いっぽうタンは、「実験」という心理学的方法に注目し、ドイツを中心とした18世紀から19世紀にいたる心理学思想を検討し、キェルケゴールの《心理学》理解に寄与しようと試みている。

しかし、両者の研究に共通する問題点は、キェルケゴールの心理学思想が醸成された19世紀デンマークの事情を顧慮していない点であり、これらの心理学との関連でキェルケゴールの心理学や心理学の実験の意味を捉えていない点にある。そのため、キェルケゴールの心理学が何であるかが少なからず明らかとなっているものの、そのような学問的立場や方法の特性に十分に迫り得ていないと言えるだろう。

そこで本研究は、キェルケゴールの時代のデンマークにおける心理学を顧慮しつつ、彼の心理学、とくに「実験的心理学」、「心理学的実験」について解明を試みる。本論を通して、キェルケゴールの心理学的方法としての「実験」が何を指しているか、その特性がいかなるものであるかに迫りたいと考える。

## 1. キェルケゴール時代の心理学とその方法

まず、キェルケゴールの時代、すなわち19世紀中葉のデンマークにおける心理学がどのような学問であったかを素描してみることにしよう。《心理学》という学問の性格について確認し、その上で心理学における《実験》の問題へと進むことにしよう。

### 1.1. 19世紀デンマークの《心理学》

一般に、経験科学としての心理学が始まったのは、1879年にヴント（W. Wundt）によってドイツ・ライプチヒ大学に実験心理学教室が開設されたときとされる。しかしながら、心理学は、18世紀から19世紀にかけて次第に経験的に基礎づけられた学問へと整えられてきたものである。

デンマークでもその事情は同様である。キェルケゴール以後にデンマークで、『心理学綱要』（1882年）<sup>(7)</sup>によって経験的 science としての心理学を標榜したヘフディング（Harald Høffding, 1843-1931）は、のちの回顧的な小論で、自分が心理学を学び始めた頃（1874年）、今日的な意味での経験的な心理学はまだその緒についたばかりであったと述べている<sup>(8)</sup>が、それ以前からデンマークにおいて経験に基づいた心理学への動きは活発であった。

ヘフディングも認めているように、19世紀デンマークにおいては、自然科学との緊密な関係をもって心理現象を経験的に探求する関心が高まっていた<sup>(9)</sup>。そのような思想家としてトレショウ (N. Treschow, 1751-1833)、シバーン (F. Chr. Sibbern, 1785-1872) などが挙げられている。さらにここにシバーンの弟子であり、キェルケゴールの敬愛する教師であったポウル・M・メラー (Poul Martin Møller, 1794-1838) がくわえられるべきであろう。そしてこの系列に、わたしたちのセーレン・キェルケゴールも連なっている<sup>(10)</sup>。

ここでの関連で、とくに重要であるのはシバーンである。シバーンは、ヘフディングに先駆けて『心理学』<sup>(11)</sup>と題されるまとまった著作を著し、デンマークの心理学思想をリードした。また、1800年代に心理学は大学の基礎教養科目の一つであったが、シバーンはその講義を長らくコペンハーゲン大学において担当した。キェルケゴールもこれを2年間にわたって聴講している<sup>(12)</sup>。

シバーンによれば、心理学は実体としての心について思弁する形而上学（合理的心理学）ではなく、われわれの意識、内的対象を研究する学であり、「個人の意識生活の本性と存在様態に関する学」<sup>(13)</sup>である。その具体的な内容は、カント＝テーテンズ的な心的能力の三分、知・情・意の諸能力について経験的な考察である。そしてその序論的部分として生理学をも含んでいた。このような心理学の構成は、メラーでもほぼ同じであった<sup>(14)</sup>。

方法論に関して言えば、シバーンの心理学では「観察」(lagttagelse)と「熟考」(Eftertænkning)が挙げられる<sup>(15)</sup>。さらに観察は、自己自身や他者の意識現象を観察する「内的な自己観察」(egen lagttagelse)、また言語、神話、諺言などの分析である「外的対象の観察」(andres lagttagelse)に区別される<sup>(16)</sup>。自己または外的な対象の観察によって研究材料をえて、これに内省（熟考）をくわえ、人間心理の探求しようと試みるのがシバーンの心理学なのである。しかし、この心理学では「実験」は方法としては言及されていない。

## 1.2. 19世紀デンマークの《実験》心理学

つづいて《実験》心理学、および《実験》について検討してみよう。すでに述べたように心理学と実験という言葉が今日的な意味で結び付けられたのは、ヴント以来である。もっともヴント以前にも「実験心理学」(ドイツ語: Experimental Psychologie、デンマーク語: eksperimentel psykologi)という表現は使用されていた。問題は、これが何を意味しているかである。しかしこの問題に取り組む前に、そもそも《実験》(eksperiment)という言葉が何を意味していたかを確認しておかなければならない。

《実験》という言葉を知ったとき、わたしたちは物理学や化学で学んだ、いわゆる実験を想起する。科学的な実験は、その人為的な《操作性》と《再現性》によって特徴づけられるが、この意味で《実験》という語が排他的に用いられるようになったのは、おそらく19世紀後半以降、自然科学の影響力がわたしたちの社会において決定的となってからであると思われる。したがって《実験》(eksperiment)の語が古くは、より幅広い意味を有していた事実をここで確認する必要がある。

語源的にみれば、“eksperiment”は、英語で経験を意味する最も一般的な言葉“experience”と同じラテン語の動詞“experiri”（試す、試みる）から派生している。派生語“experimentum”の本来の意味は、「試み」「験すこと」であり、さらに言えば「経験に基づいた証し」(det paa Erfaring grundede Bevis)であった<sup>(17)</sup>。この言葉は、ホングが指摘するように、キェルケゴールの時代には、おそらく一般的な語彙の一つではなかった<sup>(18)</sup>。

ただし学問の世界では、事情がちがった可能性は残されている。F. ベーコン以来、「実験」、または「実験的」(eksperimental)という言葉は、今日に通ずる意味で用いられているように思われるからである。しかしながら、ベーコンにおいてもこれらの語は必ずしも現代的な「実験」だけを意味するのではなく、より広く「特定の個々の経験」<sup>(19)</sup>を指すものでもあった。そのような事情は、キェルケゴールの時代にも大きく変わらなかったと思われる。

「実験」という言葉に関連して、キェルケゴールの時代における最も大きな出来事は、エアステズ(H. C. Ørsted, 1777-1851)による電流の磁気作用の発見であろう。エアステズはある実験の結果、電流が磁気を生み出すことを発見し、電流と磁気が相互に変換可能であるとの着想を生んで今日の電磁気学の緒を開いた。その成果はラテン語の論文“Experimenta circa effectum conflictus electrici in acum magneticam”[磁針における動電気の効果についての試み]として発表され、世界にセンセーションを巻き起こした。それはただちにデンマーク語にも翻訳されたが、その翻訳では、“experimenta”は“Forsøg”[試み]に置き換えられている<sup>(20)</sup>。この事実、この言葉が、必ずしもただちに今日的な意味での《実験》と翻訳されるべき言葉でなかったことを例証している。

また、それは“eksperimental”[実験的]という形容詞にも言える。この語は借用語として“erfaringmæssig”[経験にかなう]を意味するとされる<sup>(21)</sup>。メラも“Experimentale Psychologer”との表現を用いるが、それが意味するところは「実験心理学者」ではなく、“eksperiment”の本来の意味に近い「経験に依拠した心理学者」であると考えたほうが適切であると思われる<sup>(22)</sup>。

総じて言えば、キェルケゴールの時代に「実験」という言葉は、一般的ではなかつ

たし、学問的なサークルにおいても、その意味は今日的な意味での「実験」だけを指すものではなかったことが確認できるだろう。とりわけ心理学の領域では、そうでなかったろうか。当時は、心理学の領域において、今日的な意味での実験を企画することは困難であった。それに応じて“eksperimental psykologi”という際の“eksperimental”という意味も、元来の意味に近い広いものとなったにちがいない<sup>(23)</sup>。

この点をふまえて、キェルケゴールにおいて「実験」または「実験(的)心理学」という表現が、どのように用いられているかを吟味することにしよう。

## 2. キェルケゴールの《実験的》心理学

さて、「実験」(eksperiment)という名詞を形容詞形として用いるならば、“eksperimental”という語形となるのが一般的である。今日の「実験心理学」も“eksperimental psykologi”と表記される。けれどもキェルケゴールが、みずからの心理学として標榜したのは“experimenterende Psychologie”であった。この事情を考慮して、梶田啓三郎は、“experimental”を「実験-」と、“experimenterende”を「実験的」と訳し分けたと報告している<sup>(24)</sup>。語形“experimenterende”は、外来語“experiment”に動詞語尾を付して動詞化した“experimenterere”(gøre, anstille Forsøg; prøve; forsøge [試行する、試みる、試す])を現在分詞化したものである。

キェルケゴールが最終的に『反復』の副題とした“experimenterende Psychologie”が採用されるまでには、以下のような経緯があった<sup>(25)</sup>。一般に、キェルケゴールは著作の題名、仮名著者名などを決定する際には、たいへんに意を用いた。したがって、それらの意義が十分に読み取られなければならない。当初、キェルケゴールは『反復』に“Et frugtesløst Forsøg”[実りない試み]という副題を予定した。それはその後、数度書き換えられて、今日の副題に近い“Et Forsøg i Experimental Philosophie”とされて、さらに“Experimental”を変更して、“Et Forsøg i Experimenterende Philosophie”とされた。そして最終的に“Philosophie”の部分が削除訂正されて“Et Forsøg i Experimenterende Psychologie”という現在の副題となったのである。“Experiment”という語も、その形容詞形である“experimental”という語も当時のデンマークでは一般的な語彙ではなかったが、“experimenterende”という語形は、さらに稀な単語であったと思われる<sup>(26)</sup>。そのような単語が選択された理由が尋ねられねばならない。

すでに確認したように、キェルケゴールの時代のデンマークにおいては、“experimental”という語は、今日的な意味に通ずる「実験的な」という意味から、単に「(個々の特定の)経験に基づいた」という意味までを指示していたので、やや曖昧な表現であった。そこで“experimental Psychologie”、もしくは“experimental

Philosophie”と書けば、「経験に基づいた心理学」、もしくは「経験に基づいた哲学」と理解される可能性があったと推測できる。すなわち、この表記では曖昧さが伴うのである。したがって、形容詞としての“Experiment”という言葉も、単に「特定の経験」や「試み」という意味範囲ではなく、ある特定の意味——恐らくそれは《実験》という意味であろうが——に限定的に理解させることを意図して、この表現が選定されていると考えられる。

では、“experimenterende”と言われるときに、念頭に置かれているのは、どのような“Experiment”なのであろうか。

1846年になると、キェルケゴールは、(仮名著者ヨハンネス・クリマクスによって)それまでの著作活動を回顧した文章を書いて、そのなかで『反復』には“Psychologisk Experiment”という副題が添えられていると証言している<sup>(27)</sup>。現実の副題は“experimenterende Psychologie”であって、この証言は正確ではない。しかし、この証言が意図的な書き誤り、書き換えであるとすれば、それは当然、『反復』から2年後に刊行された「責めありや—責めなきや」の副題“Et psychologisk Experiment” [一つの心理学的実験]との関連性を、キェルケゴールが意識していたからだと判断できる。

『反復』では副題で挙げられる以外に、「実験的心理学」、および「心理学的実験」について読者に何ら説明は与えられていない。いっぽう「責めありや—責めなきや」では「読者への手紙」が添えられて、必ずしも判明ではないが「心理学的実験」について報告がなされている。そこで、これを手掛かりにキェルケゴールの“Experiment”についてさらに検討してみたい。

### 3. 《心理学的実験》

“psychologisk Experiment”という表現が用いられるとき、それは一つの心理学的な方法として考えられている。そこでキェルケゴールにおける心理学的方法との関連において《心理学実験》について吟味することが必要である。

#### 3.1. キェルケゴールにおける「観察」——「実験的観察」——

すでに指摘した点であるが、キェルケゴールの時代の心理学は、彼が影響を受けたシバーンの心理学もそうであるように方法としての実験的手法を確立していなかった<sup>(28)</sup>。当時の心理学の主たる方法論的な基盤は、「観察」(observation, iagttagelse)であった。

観察が、心理学の主たる方法である点では、キェルケゴールでも変わらない。『不安の概念』で、心理学の方法として「観想と観察」(Contemplation og lagttagelse)が言及されている。これは、シバーンが心理学の方法として「観察と熟考」(Iagttagelse og Eftertænkning)を挙げるのと、ほぼ一致している。先述のように、心理学の方法としての観察は、「自己観察」と「外的対象の観察」に区分された。シバーンは、この外的な観察を、言語、神話、諺言、詩、芸術、多様な文書などの分析であるとした<sup>(29)</sup>。キェルケゴールにとっても、心理学的な観察対象となるのは、自己と外的対象である。しかしながら、シバーンとキェルケゴールは「観察」、とくに「外的観察」に対する理解が異なっている。

キェルケゴールは心理学的な観察について次のように述べている。

ある博識な作品を書いたり、文献的な典拠を探し当てるために時間を浪費することがわたしの意図ではない。心理学で引証された事例には、しばしば本来あるはずの心理学的=詩的な説得力が欠けている。(中略)きちんとした尺度に準拠して心理学や心理学的観察に携わる人間は、たとえ事実としての権威はなくとも、別の説得力をもった事例をただちに構成できるだけの人間としての一般的な柔軟性を備えている。心理学的な観察者は、人々の間に潜入して、その人々の立場を跡付けることができるように、綱渡り芸人以上に柔軟でなければならない<sup>(30)</sup>。

(傍点引用者)

このキェルケゴールの説明は、シバーンの観察理解を批判するかのようである。心理学的観察においては、文献よりはむしろ一般の人々の在り方を、つぶさに観察するようにキェルケゴールは勧めている。心理学の関心は、高尚な文献ではなく「観察者さえそこに居合わせれば、日々起こる、すべての事柄」<sup>(31)</sup>である。キェルケゴールにとって観察とは、まずもってそのような一般的な人間観察なのである<sup>(32)</sup>。

けれども、キェルケゴールの「観察」は、いわゆる観察にとどまるものではない。

さきに引用した箇所からも明らかであるように、キェルケゴールにとって心理学的実例は《構成》されるべきものである。

他人のもので彼[心理学者]が発見するあらゆる気分、あらゆる心理状態を、自分自身の身に模倣してみる。それから彼は、その模倣で彼が他人を欺きうるかどうか、彼自身が理念の力をかりて創造し、さらに推進して仕上げた心理状態のなかに他人をひっぱりこむことができるか、どうかを検分する<sup>(33)</sup>。(傍点引用者)

個々人の心理状態は、あまりに多様であり、一概に捉ええないほど複雑であることを、わたしたちもよく承知している。しかしそのような個々の心理現象を学問的に考察するためには、「部分的・不規則なもの」に伏在する、「全体的な姿や規則的なもの」を洞察する必要がある<sup>(34)</sup>。そのために心理学者は「創作的な根源性」(en digterisk Oprindelighed)をもって、他者のうちに発見した心理状態を再現し、それを内省的に精査することになる。そしてそのような精査に基づいて、心理学的な事例を創作し、さらにこれを観察することが必要であるとキェルケゴールは考えた。このような独特な心理学的方法としての観察こそが「実験的観察」(experimenterende lagttagelse)<sup>(35)</sup>と呼ばれるのである。

### 3.2. 《実験》における事実性と理念性

以上の考察から、キェルケゴールが「心理学的実験」(psychologisk Experiment)と表現する際の《実験》とは、この実験的観察の対象となる一つの詩的な創作と結論づけてよいと思われる。この意味で、心理学的な《実験》をホングが「仮想的な構成」(imaginary construction)<sup>(36)</sup>と呼ぶのは、まったく正当である。だからこそキェルケゴールは、当然のこととして「心理学的実験」と「非現実的な構成」を並べて書くことができた<sup>(37)</sup>。

わたしたちは《仮想的》なものとか、《架空》のものと同聞けば、一般には《事實的》なものよりも一段低いものと考えよう。それは人間が作り上げた虚構にすぎず、本当におこった事実には及ばないとも信じている。しかし、キェルケゴールによれば、真実は、わたしたちの思い込みに反して逆なのである。

かくて人々は、わたしの実験は現実 (virkelig) のお話であるのか、そのお話に何か現実的な根拠があるのか、という質問に答えるよう要求する。確かに、何らかの現実的な根拠はある、——つまり、それは諸範疇 (Kategorieme) である<sup>(38)</sup>。

(傍点引用者)

心理学的実験は虚構である<sup>(39)</sup>。いわゆる事実ではなく、普通の意味では現実的ではない。しかし、本当に起こったことばかりが、わたしたちにとって《現実的》なのではない。

すでに述べたように、実際に起こった個々の出来事は一面的であり、偶然的という意味で不規則であり、だからこそ固有の価値があることは無視できない。そこには事実性の権威があるとも言える。しかし、出来事、そしてそれに伴う心理現象が一回的、



個別的であるということは、裏返してみれば、それは二度と起こらないということでもあり、それは再現されえないということでもある。どんな貴重な体験であれ、再現されえないのであれば、それはわたしにとっては他人事であり、出来事以上の価値をもちえない。もしある出来事、心理現象がわたしにとっても価値をもつとすれば、そこに広く人間に妥当する真理、法則的なものが伏在するからにはほかならない。そのような真理、法則的なものが、「理念的なもの」もしくは「諸範疇」と呼ばれる。

キェルケゴールは実験をめぐって、「理念的なもの」と「事実的なもの」（歴史的なもの）とについて次のように述べる。

わたしが歴史的に知っているものは何であろうか。それは資料的なものである。理念性ならば、わたしは自分自身において知っている。そうでないとすれば、理念性をまったく知らないことになる。すべての歴史的知識は役立つ（40）。

歴史的なもの、つまり事実についての知識は、そのままでは単なる材料にすぎず、バラバラの個別的な知識にとどまる。しかし、人間一人一人に通ずる普遍的なもの、つまり「理念的なもの」が洞察されるとき、わたしたちにとっても有意義なものとなる。心理学的実験には、そのような意味で「理念的なもの」が「現実的」な要素として含まれている。ただし「現実的」といっても、歴史的、事実的であるという意味で現実的なのではなく、わたしにも、あなたにもそれが現実の事柄となりうると言う意味で《<sup>リアル</sup>現実的》なのである。

それが単に創作にとどまらず、小説や物語ではなく、「心理学的」と称される学問的な方法として意識されているのは、《実験》が人間における真理を志向しているからにはほかならない<sup>(41)</sup>。それゆえ、「心理学的実験」を通俗的なレベルで「仮想的構築」と理解するにとどまるとすれば、それを誤解したことになるだろう。

#### 4. むすび 「ソレハアナタノコトヲ語ッテイル」 (de te narratur fabula)

《心理学的実験》というキェルケゴールの表現が、現代のわたしたちにとり、きわめて誤解を招きやすいことは確かである。この《実験》は、経験的な観察に基づいているものの、創作である限りで、決して「経験的」とは言いがたい。その意味で《実験》という表現は相応しくないという判断は十分に説得的である。

けれども、少し視点を変えてみてはどうだろう。現代の科学的実験の特性は、それが「操作的」であること、また「再現可能」であるということであった。その点から言えば、キェルケゴールの心理学的実験は、十分に操作的である。

実験しながら諸範疇を直視することに喜びを覚え、そのための感性をもつ人間は  
・・・彼ないし彼女を少し変更することによって、そこから、どれだけ多くの新  
たな構成が生まれるかを考える、(以下略)<sup>(42)</sup>。

したがって彼ないし彼女は、いわば操作可能な変数に過ぎない。その初期状態、つま  
り彼や彼女の性格を変えることによって、キェルケゴールが試みる心理学的方法の成  
り行きはさまざまに変化しうるともいえる。むしろ、創作された個人の可能性を十分  
に展開し<sup>(43)</sup>、その成り行きを見極めるために、詩的な実験は細心に設計されていると  
いえる。

また、再現性という点では、確かに、いつでもどこでも同じ実験ができるという意  
味での再現性は、残念ながらもち得ないが、他方、まったく別の意味での再現性を、  
心理学的方法は備えているとは言えないだろうか。心理学的方法をするフラター・タ  
シトゥアヌスは、「わたしはいつも自分を彼の位置に置いている」<sup>(44)</sup>と告白する。それ  
は、彼自身が「クイダム」(quidam)でありうるということであるが、それはまた一  
方、読者のすべてが「クイダム」でもありうるということである。「クイダム」の心  
理学的方法において問われているものが、キェルケゴールの言う「諸範疇」であり、  
「理念性」であるとすれば、それぞれの「わたし」が「わたし自身によって」理解す  
るのでなければならないからである。まさに心理学的方法においては、「ソレハアナ  
タノコトヲ語ッテイル」(de te narratur fabula)<sup>(45)</sup>なのであって、この点で実験は、客観  
的に観察可能な対象的方法という形式ではないが、それぞれの「わたし」において内  
的に再現されていると言うことはできないだろうか。

以上のように考えれば、キェルケゴールの「心理学的方法」は、類比的ではあるが、  
今日に通ずる意味で《実験》と呼んで差し支えないと思われる。キェルケゴールは、  
そのように理解されることを意図して、あえて“Experiment”、またはそれを実践す  
る心理学という意味で“experimentierende Psychologie”という表記が選定されたの  
だと推測される。

「実験」という《心理学》(キェルケゴールの意味での)的方法として採用するに  
際して、キェルケゴールは、きわめて自覚的であったと結論づけられる。このような  
風変わりな表現が採用され、そして独特な心理学的な方法が取られたのは、キェルケ  
ゴールの深謀遠慮があったからにはほかならない。それは、先に言及した『後書』にお  
ける批評の言に、その一端が示されている<sup>(46)</sup>。そして《実験》こそは、キェルケゴ  
ールが真理伝達のために案出した決定的に重要な方法の一つであることが、この箇所か  
ら知られる。

このような《実験》的方法の実態は、キェルケゴールの伝達方法の問題をめぐる考

察、ならびに彼の創作的実践にかんする検討を必要とするだろう。したがって、その詳細な説明は、別の機会を待って試みることにしたい。

※ 本論の一部は、すでに日本宗教学会大会（大正大学、2002年）で口頭発表されている。本稿の発表に際して、その内容に大幅な補筆訂正をくわえている。

#### 【註】

キェルケゴールのテキストは原則として、現在刊行中の以下の批評的新版全集(略号、テキストはSKS、注釈はSKS K)から引用するものし、その引証箇所を、その巻数と頁で示した。

*Søren Kierkegaard Skrifter*, udgivet af Søren Kierkegaard Forskningscenteret, København: Gads Forlag, 1997-.

また、キェルケゴールの『日誌・遺稿集』からの引用は、本論で参照した箇所は、新版全集では未刊行であったため、従来通り、『日誌遺稿集(第二版)』(略号、Pap.)を参照し、巻数、分類、整理番号、必要に応じて頁数をもって示した。

*Søren Kierkegaard Papirer*, 2. udgave, udgivet af P. A. Heiberg, V. Kuhr og E. Torsting, forøgede af N. Thulstrup, bd. I-XVI, København: Gyldendal, 1968-78.

- (1) キェルケゴールの時代は、Psychologie と綴った。今日では、psykologi と綴られる。また後出の「実験」は“Experiment”と綴られたが、今日は“eksperiment”と綴る。テキストからの引用以外は、原則的に、現代の正書法にて記すことにしたい。
- (2) Pap. X 6 B 100, p. 116.
- (3) それぞれ、デンマーク語では、“den eksperimenterende Psychologi”、“Psychologiske Experiment”である。
- (4) たとえば、梶田啓三郎訳『反復』(筑摩書房、1975年)の訳注256頁、および飯島宗享著『自己について』(青土社、1989年)、107頁。最近の研究では、Anders Moe Rasmussen, “Kierkegaard og det antropologiske,” in Christian T. Lystbæk & Lars Aagaard (eds.), *Kierkegaard og ... : Hovedtemaer i Forfatterskabet*, Aarhus: Philosophia, 2001, pp. 9-24. この論文では「心理学」が、「現象学的人間学」に言い換えられる。
- (5) Howard V. Hong, Historical Introduction, in *Fear and Trembling / Repetition (Kierkegaard Writings, VI)*, edited and translated by Howard V. Hong and Edna H. Hong, Princeton: Princeton UP, 1983, pp. xx-xxxi.
- (6) Chengxi Tang, Repetition and Nineteenth-Century Experimental Psychology, in *Kierkegaard Studies, Yearbook 2002*, edited by Niels Jørgen Cappelørn, Hermann Deuser and Jon Stewart together with Christian Fink Tolstrup, Berlin: de Gruyter, 2002, pp. 93-118.
- (7) Harald Høffding, *Psykologi i Omrids: Paa Grundlag af Erfaring*, København: P. G. Philipsens Forlag, 1882.
- (8) H. Høffding, *Psykologi og Autobiografi Filosofiske Meddelelser*, II, 3., (Det Kongelige Danske Videnskabernes Selskab), 1943, p. 12. この小論は元来1930年に書かれたものであるが、この中で、ヘフディングは、ヴントの実験心理学やフェヒナーの精神物理学を経験科学としての心理学として言及する。これにヘルバルトの数理心理学が加えられるべきであろう。
- (9) H. Høffding (ed.), *Udvalgte Stykker af Danske Filosofiske Litteratur (Mindesmærker af Danmarks National-Litteratur*, udgivet af Vilh. Andersen, III, Filosofi), København: Gyldendal, 1910, p. 99.

S. キェルケゴールの心理学的的方法（平林）

- (10) Cf. Finn Hauberg Mortensen, En dynamisk psykologi, in *Dansk Litteraturhistorie*, 3. udgave, bind 5, København: Gyldendal, 2000, pp. 532–533.
- (11) Frederik Christian Sibbern, *Menneskets aandelige Natur og Væsen: Et Udkast til en Psychologie*, København: Gyldendal, 1. Del, 1819, 2. Del, 1828。本書は、のちに増補されて、題名も『心理学』に改められる。
- (12) Valdmær Ammundsen, *Søren Kierkegaards Ungdom: Hans Slægt og hans religiøse Udvikling*, København, 1912, p. 78–79.
- (13) Sibbern, op. cit., 1. Deel, p. 3.
- (14) Cf. Poul Martin Møller, Optegnelse til Forelæsninger over Psykologi, Collinske Samlinger 379, 4<sup>o</sup> på Det Kongelige Bibliotek. この手稿は未完であるが、メラウの心理学の枠組みを伝える貴重な資料である。メラウは心理学を生理学など人間についての自然科学的な考察、心身関係の問題などから始めて、心の三能力へ議論を展開している。
- (15) Sibbern, op. cit., p. 5.
- (16) Ibid.
- (17) Paul Arnesen, *Ny Latinsk Ordbog til Brug for den Studerende Ungdom*, København, 1848, p. 1046.
- (18) Hong, op. cit., p. xxi.
- (19) ベーコン著・桂寿一訳『ノヴム・オルガヌム（新機関）』, 岩波文庫, 1978年, 訳注70（1）, p. 225.
- (20) Rolf Lindborg, *Ånden i Naturen: Naturfilosoffen H. C. Ørsted — eksperimentalfysiker*, trans. by Gitte Lyngs, København: Gyldendal, 1999, p. 207.
- (21) Ludvig Meyer, *Fremmed ordbog* ; ved J.P. F.D. Dahl og F.V. Dahl ; indledning af Iver Kjær, 8. udgave, 3. oplag København: Gads Forlag, 1998, p. 350. 本書は、1924年に刊行されたデンマーク語外来語辞典のファクシミリ版である。
- (22) Cf. Poul M[artin]. Møller, *Efterladte Skrifter*, 3. udgave, 3. bind, København: C. A. Reitzel, 1856, p. 16. 翻訳は以下のとおり。「日常生活において一人の人間を判断しなければならないときに、劇作家と experimentale Psychologer が簡単にバカにされる理由は、彼らが現実に見たことと自分たちの頭でつかちな本性が一致しないからである」。
- (23) Cf. Carsten Zelle, “Experiment, Experience and Observation in Eighteenth-Century Anthropology and Psychology — the Examples of Krüger’s Experimentalseelenlehre and Moritz’ Erfahrungsseelenlehre,” *Orbis Litterarum* 56, 2001, pp. 93–105. この論文は、18世紀末のドイツにおける心理学的的方法の困難を描く。ツェレによれば、結局、当時、心理学の「実験」的な基礎は構築され得なかった。
- (24) 梶田訳, 前掲書, 訳注256頁。梶田は、“experimental”を「実験に基づく」と、“experimenterende”を「実験を目的とする」との意味に解している。
- (25) Pap. IV B 97, 1 ; SKS K 4, p. 8, 11.
- (26) *Ordbog over det danske Sprog*, udgivet af det Danske sprog- og litteraturselskab, København: Gyldendal, 1981, bind 4, p. 256. この二つの語は、“Eksperiment”の派生語として示され、しかも専門的な語とされている。また“eksperimentere”は、“eksperimental”の後に表示されている。
- (27) SKS 7, p. 239.
- (28) Tang の前掲論文を参照されたい。またシバーン心理学と実験との関係については、Himmelstrup の前掲書, 128頁を参照。
- (29) Sibbern, op. cit., p. 5.
- (30) SKS 4, p. 359.
- (31) SKS 4, p. 360.
- (32) このような人間観察の能力を、キェルケゴールがいかに磨いたかについてマランツクが報告している。Gregor Malantschuk, *Søren Kierkegaard som eksperimentierende Psykolog*, in *Frihed og Eksistens: Studier i Søren Kierkegaards tænkning*, udgivet af Niels Jørgen Cappelørn og Paul Müller, København: C.A. Reitzel, 1980, pp. 32–37.
- (33) SKS 4, p. 360.

- (34) *SKS* 4, p. 359.
- (35) *SKS* 4, p. 378.
- (36) Hong, op. cit., p. xxiv.
- (37) *SKS* 6, pp. 178–79.
- (38) *SKS* 6, p. 412.
- (39) Cf. *SKS* 6, p. 374. 「幸いにも、わたしの主人公はわたしの思考実験の外部には存在していない」。
- (40) *SKS* 6, p. 405.
- (41) Cf. *SKS* 6, p. 374. 「[わたしの意図は、] 彼 [実験のクイダム] のなかに、もしくは彼の語る多くの言葉のなかに何らかの真理に気づくことである」。
- (42) *SKS* 6, p. 436. 別の箇所で、以下のように述べている。「実験するものは、諸範疇が何を要求しているかをまったく妨げられずに見るために、諸範疇だけを動かし、誰かがそれをしたのか、またはできるのかということに頓着しない」(*SKS* 6, p. 431.)。
- (43) *SKS* 6, p. 404.
- (44) Ibid.
- (45) *SKS* 6, p. 440 ; 441. この言葉の出典は、ホラティウス『風刺詩』第1巻1, 69である。柳沼重剛編『ギリシア・ローマ名言集』, 岩波文庫, 2003年, 128-129頁を参照。
- (46) 「『反復』という書物には副題に《心理学的実験》という言葉が添えられている。これが二重に反省された伝達形式であることがわたしには直ちに明瞭になった」(*SKS* 7, p. 239.)。